瑞穂市生津　神明神社・豊受神社の大祭について
（The Festival of Shimmei shrine and Toyouke Shrine）

経営学科　米田 真理
YONEDA, Mari

はじめに

瑞穂市生津の神明神社（生津滝坪町 72 番地）と豊受神社（生津字森下 145 番地）では、毎年 5 月 4 日に大祭が行われている。これについて筆者は、本誌の前号で「地域の伝統行事を守る―瑞穂市生津の神明神社と豊受神社の祭礼によせて―」と題して紹介し、実際に見学するのを楽しみにしていた。ところが、恥ずかしながら予習不足のため、現地に到着したのは大祭が終わってしまった後で、たいへん残念であった。

だが、その後、平成 28 年の大祭に直接携わった下生津北組・宮総代の棚橋新五さまと、同組にお住まいの棚橋眞二さま、新井明さまから、祭事運営に関わるお話を聞いたり、貴重な記録を見せていただいたりすることができた。

祭事については『穂積町史　上巻（古代・中世）』（穂積町教育委員会、昭和 54 年）の 425～434 ページのほか諸書に記されているが、前稿に示した通り、その内容にはさまざまな相違点が見られる。その意味で、今回提供を受けた資料は、現在、地域の方々によって実際に行われている大祭の姿が知られる点で、非常に貴重である。特に感銘を受けたのは、行程表や準備物などについて実に細部まで記録化・マニュアル化されている点で、祭礼行事を後代に伝承したいという熱い思いが伝わってきた。

本稿の第1節では、この資料をもとに、大祭のスケジュールに沿って行事を紹介したい。また第2節では、筆者の専門である文化史の観点から、今後、この大祭について調査・研究を進めていくうえでの見通しについて述べたい。

図 1. 大祭の日の豊受神社（平成 28 年 5 月 4 日　筆者撮影）

1.　大祭執行のスケジュール

1-1.お取り持ち組の役割

神明・豊受神社の大祭は、生津地区の全域（新しい住宅地を除く）を下生津北組、下生津南組、上生津西組、上生津東組の 4 組に分け、それぞれの組が 4 年に一度、「お取り持ち」すなわち当番組となって執行される。平成 28 年は、下生津北組が当番だった。

当番組以外の 3 組からは、大祭の当日、宮総代と自治会長が来賓として出席する。この他の来賓としては、瑞穂市長、市議会議長、上生津区長、下生津区長のほか、次年度の灯元（平成 29 年は上生津東組）が出席する。

大祭に必要な経費は、平成 28 年度お取り持ちだった下生津北組の場合、全戸が 1,000 円ずつ負担するほか、下生津自治会、下生津区長会からの 10 万円ずつの助成金により賄われる。費用は供物・用品類の購入や宮司等への礼金のほか、大祭後に行われる「山颪（やまおろし）」と呼ばれる打ち上げ会での飲食費用や、会議費などが挙げられる。

当番の組では祭りに向けたさまざまな準備が行われる。以下、大祭のスケジュールに沿って行事の進行を見ていきたい。

1-2.長期間におよぶ準備

1-2-1. 灯元

大祭のいわば幹事役である灯元は、前年の大祭後、速やかに、その年の当番組（平成 27 年は神明神社の上生津西組）の灯元から神社で使用する道具備品等 51 品目を受け取る（＝灯渡し）。衣装には防虫剤を入れ、虫干しを行うなど、1 年間責任を持って預かる。灯元は、前回、組が当番をつとめた 4 年前の準備段階にすでに決定しており、前の灯元の動きを見ながら心構えを整えていくという。

1-2-2. 会議

3 月ごろ、役員を選出し作業内容を確認するための全体会議が開かれる。平成 28 年当番の下生津北組では、2 月 10 日、3 月 10 日、4 月 1 日の 3 回行われている。このとき、巫女と弓童子を選出するためのくじ引きが行われるほか、4 年後の灯元も選出される。

そして 4 月に入ると役員会議が開かれ、買物係や作業当番、行列の順番等の細かい事項が決定される。

これらの会議を通じて、組内で割り当てられる役には次のようなものがある。

［祭典に関わるもの］次期灯元（1 名）、本膳（4 名）、巫女（1 名。平成 28 年は小学 4 年生女子。母親が草履係を務める）、弓童子（2 名。平成 28 年は小学 6 年生と 4 年生の男子）、おからす吉凶占い（1 名）、総合司会（1 名）

［祭事当日の行列に関わるもの］太鼓・長持・角桶（各数名）、八足・その他（各数名）

［事務に関わるもの］書記（2～3 名）、会計（2 名）、記録係（6 名）

［準備に関わるもの］弓作り（数名）、注連縄作り・榊作り・買物係（各数名）、蛤と鮒係（2 名）、料理注文（3 名）、蒸器補助（2 名）

［その他］運転手（1 名）、袴等の着付（3 名）、休息用品（6 名）

1-2-3. 巫女・弓童子の準備

巫女は小学校 4～6 年生の女子から 1 名、弓童子は小学校 5～6 年の男子から 2 名がつとめる。4 月下旬ごろ、巫女の着付け合わせと、弓童子への弓の指導と、練習が行われる。

1-3. 大祭直前の準備

1-3-1. 町内全員

大祭の本格的な準備は 5 月 2 日から行われる。平成 28 年の当番である下生津北組では班ごとに次のような役が割り当てられ、午後1時に公民館に集合し、総出で進められた。

灯元家の飾付（4 班）、両神社の飾付（1 班・7 班）、飾棚（10 班）、注連縄作り（2 班）、弓・矢作り（3 班）、干し棚（4 班）、お祓い用の榊作り（10 班）

干し棚は青竹を材料に、幅 1.8m×奥行 1.0m×高さ 1.6m（うち 0.2mは地中に埋める）の棚を作る。また、注連縄もわらから手作りする。

大祭で弓同時が射る矢と弓は女竹で作る。矢尻（鏑矢 4 枚、双矢 4 枚）にはベニヤ合板を用い、矢羽根は障子紙から作る。

お祓い用の榊は、宮司の指導のもと両宮それぞれ大 1 本、小 15 本（予備も含む）を作る。

この他、買い物係は御神酒や、するめ、鰯、昆布、野菜類、塩といった供物のほか、供物の下に敷く半紙や、ろうそく、さらには巫女の衣類（白足袋、襦袢など）、本膳係が着用するパンツやわら草履などを調達する。供物のうち、鮒4疋と蜆（もしくは蛤）は、大祭当日の朝、活かした状態で灯元家に届けることになっている。

1-3-2. 灯元家

大祭の期間中、灯元家は家の内外を開放し、祭りの諸準備に責任を負う。

灯元は2日に神明・豊受両神社に幟（のぼり）を建て、国旗、提灯台の準備を行う。灯元の家にも国旗と提灯台を準備し、幕を張る。この際、前回の灯元が飾り付けの指導にあたる。両宮と灯元家の提灯には夕刻から灯が点される。

この他、次に述べる本膳や、供物を並べておく飾り棚、御神酒、洗米のほか、酒とつまみ、お茶や茶菓子などの準備を行うのも灯元の仕事である。

1-3-3. 本膳

本膳4名は、神前への供物の中心となる、米を材料とした「本膳」の製造を担うという点で重要である。

5 月 2 日に根尾川谷汲の左岸に出向き、白色のパンツ 1 枚（かつてはふんどし 1 枚）に、わら草履の姿となる。そして川に入って自身を清め（禊ぎ）、続いて材料となる米と、調理器具である角桶（つのおけ）、枡、杓文字、突き棒、さらに飾り付け用の三宝と、大祭の行列で本膳を載せて運ぶための御舟も川の水で洗う。これら一連の行事の際には、本膳の経験者が指導に付き添っている。そして灯元家にて米を清水で洗い直し、三等分してバケツで浸水させる。

翌 5 月 3 日には、まず川で禊ぎを行った後、灯元家で本膳を作る。材料はうるち米 9 升に餅米 2 升を混ぜたもので、3 回に分けて蒸し上げ、角桶に移す。そして神前に供える本膳を大小 4 つずつと、占い用の「おからす」を 2 個、さらに参拝者に配る俵形の「おからす」を 30～40 個作る。本膳の成形は、蒸し上がった米を升形に入れて棒で突いて行う。こうした一連の作業を行う際にはマスクを着用し、やはり白色のパンツ 1 枚の姿である。

1-4. 大祭当日

大祭は灯元家から神明・豊受両神社へ供物を運ぶ行列と、神社での祭典によって構成される。全体の流れは、灯元家―（行列）→神明神社祭礼―（行列）→豊受神社祭礼―（行列）→灯元家となる。

1-4-1. 行列

行列への参加者は 8 時 45 分に灯元家に集合するが、その前に、和装で参加する巫女と弓童子、本膳は灯元家で着付けを行う。

午前 9 時 10 分から出発の準備を始め、9 時 30 分から進発式を行う。司会の進行に従い、宮総代の挨拶に始まり、来賓や主だった役の紹介を行った後、灯元家を出発し、まず神明神社に向かう。行列の順番は次のようになっている。

司会者（および道路通行許可書携行者）→宮総代→太鼓（棒に吊し、その棒を 2 人が前後で担ぐ）→角桶→市長・市議会議員など来賓→上・下宮総代→上・下生津区長→上・下自治会長→弓童子→宮司→巫女（および付き人）→本膳2名→長持→本膳2名→灯元→灯受→御舟→八足→振舞の飲料等→一般の参加者

＊宮総代は、神明神社に向かうときは上生津が前で、豊受神社へは下生津が前になる。

＊太鼓、角桶を運ぶ役は、灯元から神明神社までと、そこから豊受神社までとで交代する。

＊行列の先頭と末尾、さらに行列の両側を挟む形で交通安全委員が安全の確保を行う。

行列の大きさは、幅 3m、長さは 30mにも及ぶ。平成 28 年の参加者は、約 200 名であった。

1-4-2. 神社での行事

午前 10 時頃に行列が神明神社に到着すると、まず巫女と本膳が中鳥居から先に進むための装束を整える。巫女は草履に履き替え、頭に丸い注連飾りを載せる。また、本膳はマスクを着用する。

図 2　巫女と、長持を捧げ持つ本膳（平成 28 年 5 月 4 日　棚橋新五さま提供）

次に本膳 2 名が御舟に幣帛料と本膳・副膳を1個ずつ載せ、榊を飾る。この御舟を本膳 2 人が持ち上げ、巫女の頭上に掲げると、3 人いっしょに拝殿まで運ぶ。残りの供物は、長持に入れたままで本膳が拝殿まで運び、本膳が取り出して宮司に渡す。以下、弓射の儀やおからす投げといった儀式が続き、神明神社での行事が済むと、ふたたび行列を作って豊受神社に向かう。

豊受神社は神明神社から約 400mの距離にあり、午前 11 時頃から行事が始められる。内容は神明神社と同様であるが、弓童子二名が神明神社と豊受神社で左大臣・右大臣の役割を相互に交代するほか、玉串奉典の順序が神明神社では上生津が先、豊受神社では下生津が先など、両神社で手順等の入れ替えがある。

図 3　双矢を射る弓童子（平成 28 年 5 月 4 日　棚橋新五さま提供）

神社での式典には決まった次第と司会者の台本が作られている。平成28年度の、豊受神社での式典次第は次の通りである。

一同礼→①開式の辞（お取り持ち組の宮総代。平成28年度は下生津北組）→②修祓（しゅばつ。お祓いのこと）→③宮司一拝（一同も共に拝礼）→④開扉→⑤献饌（けんせん。本膳が長持から供物を出す）→⑥祝詞奉上→⑦弓射の儀（左大臣の双矢、右大臣の鏑矢の順に）→⑧おからす投げ→⑨玉串奉典（順に、巫女、下生津南組宮総代、上生津東組宮総代、灯元、次年の灯元（上生津東組）、市長、市議会議長、下生津区長、上生津区長、下生津自治会長、上生津西自治会長、上生津東自治会長）→⑩撤饌（てっせん。本膳が供物を長持に収納する）→⑪閉扉→⑫宮司一拝（一同も共に拝礼）→⑬宮司挨拶→⑭来賓挨拶（市長、市議会議長、上生津区長）→⑮閉式の辞（平成28年度は併せて感謝状の授与式）

こうして両神社での祭事がつつがなく済むと、ふたたび行列を作って灯元家に帰る。灯元家には午前11時30分ごろ到着し、一同、公民館に集まる。

行列の際の服装は、巫女と弓童子、本膳が和装であるほかは、一同、洋装の黒礼服を着用している。ただし、図4の写真からわかるように、参加者が平服だった時代もあったようである。

図4　平成8年の行列写真（棚橋新五さま提供）

1-5. 山颪（やまおろし）

大祭の翌日である5月5日には、反省会である「山颪」と後片付けが、組総出で行われる。平成28年は、次のような順序で進められた。

まず、午後12時20分から公民館にて山颪が開かれ、赤飯や野菜の煮物などの食事が振る舞われた。このとき、次回の灯元を決定した。そして午後1時30分から両神社と灯元家の幟（のぼり）や国旗、提灯台、幕などの後片付けが行われた。このとき灯元は酒や湯茶、つまみ、茶菓子を用

意する。また、本膳 4 名は「本膳切り」の作業を行う。なお、後片付けの後で夕刻から山颪が行われる年もある。

後片付けが済むと、次のお取り持ち組に道具や備品など 51 品目を渡す「灯渡し」という重要な行事がある。平成 28 年は午後 5 時から、豊受神社の宮総代と、今回の灯元家とで、上生津東組の次期灯元家へと無事届けられた。

以上のように、神明・豊受両神社の大祭は、少なくとも当日の前後 3 日間、灯元ともなれば数年間にわたる行事によって成り立っていることがわかる。それも、その年にお取り持ち組である地区の全世帯が、準備や行列に関わり、責務を果たしているのである。伝統行事を伝承しようという熱い思いが、地域の構成員を結んでいる好例だといえよう。

2. 神明・豊受両神社の歴史的背景

2-1 両社の歴史を伝える史料

神明・豊受両神社の歴史は、具体的な史料によって江戸時代初期にまで溯り得ることができる。『穂積町史 上巻』にも両社の修繕に関する史料が掲載されているが、今回、『豊受太神宮造営記録写』(昭和 35 年3月、棚橋嘉市氏書写)を調査することができた。これは江戸時代初期の寛永 6 年(1624)から維新期の慶応 3 年(1867)までの、主に屋根の葺き替えに関する記録である。

この中に、江戸時代前期である正保 5 年(1648)の宮札の写しがある(原典は縦書き)。

(右)濃州厚見郡﨑(ママ)阜住人藤原朝臣家沢大工者浅野六兵衛
〔梵字〕奉建立御遷宮通太神宮上葺惣氏子　敬白
(左)濃州本巣郡生津村加藤伊兵衛願人　正保五年閏正月吉日

この右側に記される花王院(けおういん)は、生津滝坪町2丁目にある高野山真言宗の寺院である。この寺に所属する「剛敞」(ゴウショウか)が「遷宮師」と名乗り、両宮の行事に関与していたことが知られる。未だ調査していないが、神明神社の近くにあることから、あるいは両宮の別当寺(神社の事務的な職務を負う寺院)だった可能性もあり、神明・豊受両神社は地域の氏神としての様式を備えていたことが窺われる。

このように、両神社が長い歴史を通じて地域に根ざしてきたことが知られるが、今後、その背景を考えていく上での観点を、以下に挙げておきたい。

2-2. 伊勢神宮と生津村

神明神社と豊受神社がそれぞれ「内宮」「外宮」と称される背景として、伊勢神宮との関わりについては次の二つの観点から考えることができる。

2-2-1. 伊久良宮（いくらのみや）との関係

一つ目の観点は、すでに広く述べられていることだが、伊久良宮との関係である。瑞穂市居倉の天神神社は、伊勢神宮が現在地に定まる前に天照大神を祀っていた地（元伊勢）のひとつ、伊久良宮と伝えられている。第十一代垂仁天皇の時代、倭姫命（やまとひめのみこと）が天照大神の鎮座すべき場所を求めて各地を旅した記録とされる『倭姫命世紀』によれば、倭姫命は伊久良宮に 4 年間滞在した後、尾張国中嶋宮、伊勢国桑名野代宮を経て伊勢の地に落ち着いたという。

生津はこの居倉から見て 5 ㎞ほど東北東に位置する。豊受神社の伝承では、倭姫命は生津から舟で伊勢に向かったとされ、舟が出入りしたゆえに「生津」といい、森の下で泊まったゆえに「森下」と呼ぶと伝えられている。（「森下」は豊受神社の森よりも低いところという意味だとも。『地名が語る　ふるさと穂積』p254～p255、穂積町教育委員会、平成 5 年）。

2-2-2. 伊勢御師との関係

「御師」とは、特定の寺社に所属して、参詣者を案内したり参拝・宿泊などの世話をしたりする者のことである。特に伊勢神宮のものは「おんし」と称して、伊勢信仰を各地に伝承していた。

伊勢の御師が近世初期以来、当地と関わっていたことを示す、次の事例がある。糸貫川から取水していた席田用水は洪水の度に井堰が切れたため、江戸時代初期の寛永 2 年（1625）、井組村々は相談のうえ、伊勢御師にお祓いを請い、山口井堰に立てたところ無難となった。以後、伊勢御師久保倉氏ほかに村々から初穂米を上納していたという（『日本歴史地名大系　岐阜県の地名』p373、平凡社、1989 年）。

このように伊勢御師が当地で活躍する中で、神明・豊受両神社が勝手に「内宮」「外宮」と自称できたとは考えにくい。当地における伊勢信仰の状況をふまえ、今後も調べを進めていきたい。

2-3. 神明・豊受両神社と糸貫川

今回、神明・豊受両神社の大祭について調べていく中で、これまでは注目されてこなかった河川との関わりに思いが至った。それは、供物の中でも重要な本膳について、係の人が体を清めたり、米や調理器具を洗浄したりするために、「根尾川谷汲の左岸」に赴くことから得られた発想である。

両神社は糸貫川と旧中山道が接するところに位置する。糸貫川は、昭和の木曽川水系改修工事の結果、廃川となったが、中世以前には白山や越山を水源とする豊かな水量を誇り、長良川に注ぐ根尾川の本流であった。平安時代には「いつぬき川」が、歌謡の催馬楽や、『枕草子』『金葉和歌集』といった文学作品の中に見られ、都でもその名の通っていたことが知られる。

だが、室町時代後期の享禄 3 年（1530）6月、洪水で長良川への流入口が土砂で埋まったことにより、根尾川の流路は現在のものに変わり、糸貫川の流量は減少した。これにより、糸貫川を水源としていた席田（むしろだ）用水、真桑用水も水の確保が困難になり、江戸時代を通じて紛争が続いていた。

生津村は、江戸時代を通じて席田用水を利用し、他の村々とともに訴訟状に名を連ねている。だが、用水の南端、最下流に位置する生津村にとって用水の水は決して十分ではなく、同じく江戸時代を通じて、糸貫川から直接、水を引き入れてもいたという(『穂積町史　通史編　上巻(古代・中世)』p214～p219)。

両宮の大祭で本膳を整えるために赴く根尾川の谷汲左岸は、中世末までは根尾谷の水が平野部に流れ出していた山口の辺りである。生津村の生活を支えていた糸貫川が長良川に注ぎ込み、旧中山道とも合流する地点に神明・豊受両神社が位置するということは、重要な意味を持つと思われる。

以上のように、生津の神明・豊受両神社については、伝統文化としての大祭をはじめ、地域の氏神としての歴史など、興味深いことがたくさんある。今後も、調べを進めていきたい。